# 哀モード

黒田 享
現代語・現代文化学系助教授

携帯電話を使い始めてずいぶん経つ。

もともと建築現場で仕事をしている父が仕事用に普及のごく早い段階から使っていたことから，「移動電話」自体はごく身近な存在だった。父の車を借りているときに，仕事関係の電話がかかってきて大弱りだったことも何度かあったものである。

しかし当時から「移動電話は基本料金・通話料が高い！」というイメージがあったため，自分ではなかなか手を出さずにいた。ケチな性格なのである。

## フィンランドと携帯電話

そんな私が2000年秋からフィンランドに一年間の在外研究に行くことになったのも何かの縁だったのだろうか。

当時の北欧，というか，フィンランドとスウェーデンはITバブル真っ只中であり，町を歩いていても1ブロックに2軒は携帯電話ショップを見つけるような状況だった。

だからもちろん街は携帯電話で話す人で満ち溢れる。ヨーロッパでは「無口」で通るはずのフィンランド人が，話すわ話すわ，大学，レストラン，バスの中，スーパーマーケット，そこらじゅうであった（そのころ日本で盛んに問題視されていた「電磁波」は気にならなかったのだろうか)。中には携帯電話で話しながら対面販売式の商店で品定め，注文，支払いまで済ましたり，バス停で携帯電話を使いはじめ，やって来たバスに電話を切らないまま料金を払って乗り込むような猛者もいたし，自動車の運転をしながら片手に携帯電話を持つドライバーを見るのも決して珍しくなかった。フィンランドでは小型車に関してはまだまだマニュアルトランスミッションの率が高く，あれはなかなか忙しかったはずだが，どんなものだったのだろうか・・・。

びっくりしたのは，料金である。当時

フィンランドでは固定電話の基本料金は月50フィンランドマルッカ。これは当時の為替レートではだいたい750円にあたる。もちろんこれに通話料が上乗せされるが，一年程度の滞在では知人もそうできず，電話をかけることはほとんどなかった。

携帯電話の方はというと，確かに通話料は割高であったが，その差はごくわずか，その上基本料金は30マルッカ，つまり450円相当で，ほとんど電話をかけないために通話料を加えた合計料金は固定電話よりも安くなってしまうのである。

もちろん，日本からフィンランドに電話をかける場合，携帯電話あてでは固定電話あてよりも高くつくことだろう。しかし，日本との連絡はほとんど電子メールで行っていて，電話を使うことはまれであったため，これはさして重要な問題でもない。

こうなると，電話は携帯電話だけに絞る，ということを思いつくのは当然である。そしてわたしは実際に，設置からなんと二ヶ月で固定電話を解約してしまった。実際にフィンランドでは固定電話の利用者は年々減少傾向にあるそうで，さもありなん，である。

**携帯電話の効用**

さて，自分で持つのは初めてであったので，携帯電話を使い始めた当初はいろいろと戸惑うことがあったのはもちろんである。そもそも電話を「携帯」する習慣がなかったため初めのうちはせっかくの携帯電話を家に置いたまま出かけてしまう，とか，電話をかけるとき以外は電源を落としておく，というような古典的なボカもさんざんやったものだ。

興味深かったのは当時日本で大流行していた「携帯ストラップ」がまったくはやっていないことであった。当時のフィンランドの若者たちの間ではもっぱら携帯電話の表面パネルをカラフルなものに交換するのが携帯電話の「楽しみ方」だったのだ。日本では折りたたみ式が主流になっているためか携帯ストラップの流行は現在では下火になってしまったようで，せいぜい販促品としてもらう程度だが，今でも姿を見るたびにこのことを思い出す。

携帯電話の固定電話に対する最大の機能上のアドバンテージは言うまでもなく「留守で電話に出られない」ということがないことである。これは「何度かけてもいないじゃないか」と言われるとどうも申し訳なく思ってしまう性分のわたしには精神衛生上とてもよろしいのであ

る。

それと，これは使い始めてからわかったのだが，携帯電話というものは発信者がわかるのである。

私は学生のころアルバイトで某大手学習教材会社のコールセンターでオペレーターをしていたので，電話を取ること自体に恐怖はない。しかしそれでも発信者がわからない電話に出るのはいささかの勇気が要るのである。

**帰国してますますハマる**

さて，携帯電話の便利さに魅了されてしまったわたしが帰国後即座に携帯電話を買ったのは当然の成り行きだった。

日本の携帯電話はヨーロッパや中国で用いられている方式と違うせいか，フィンランドの携帯電話に比べると音質がクリアでなく，より頻繁に回線が切断されてしまうように思えるが，なんといっても軽量・小型で，日本人の中でも小さめな方である私の手でも充分無理なく操作できるのは助かった。画面がカラーであったのには感動さえしたものである。

携帯電話が活躍する場面はつくばに戻ってからも私用・公用幾度となくあった。建物内では「圏外」になってしまうこともあるが，研究室にいなくとも連絡をもらえるので学内でも重宝している。職員録の自宅電話の欄に携帯電話の番号を掲載してしまったほどである。

フィンランドで使っていたNOKIA社製の携帯電話と日本製のそれとを比べた時に一番感じるのは上に書いた重量・サイズの違いであるが，もう一つは日本製携帯電話の多機能性である。いかにも日本人が作ったものらしい。

おかげで日本製携帯電話に慣れるうちに，スケジュールや住所録の管理も携帯電話でするようになってしまい，手帳を持ち歩くこともすっかりなくなってしまった。

エンターテインメント機能を活用することもある。一時凝ったのはいわゆる「着メロ」で，これはインターネットからダウンロードする，という手もあるが，すぐに自分で入力することを始めた。というのも，わたしは学生時代に一時期作曲を習っていて，多少の心得はあるのだ。結局一月ほどで飽きてしまったのだが，没頭している最中はまさかこんなことで当時勉強した和声法や対位法の知識が生かせるとは・・・と感慨にふけったものである。ちなみに，課題として自分が作った曲を入力しようとして当時のノートを探したが，残念なことにもう捨ててしまったようで，出てこなかった。

## 思わぬ便利さ

さて，私の生活に一番劇的な変化が起こったのは昨夏，ついに禁断の（？）iモード契約をしてしまってからである。

日本に帰国した当初は純粋に電話としてのみ使おうと考えていたので，電話以外のサービスは契約していなかった。しかし人間どうしても変化が欲しくなるもので，ほぼ一年ほど使ったあげく，旅先や移動中の時間つぶしにでも・・・と思って契約してしまったのだ（契約を決心したのは8月の「お盆」前，わたしが一年でもっとも退屈する季節であった）。しかし，携帯電話で見られるようなウェブサイトは思ったよりも少なく，気がつくとむしろ電子メール機能の方に夢中になっていた。

携帯電話同士でやり取りする種のメールサービスはフィンランドでもあり，それはそれで役に立ったのだが，iモードメールは通常の電子メールとしても使えるので，携帯電話以外の相手とも自由にメールのやりとりができる。最初は「う～ん，めんどう」と思っていた文字入力にもいつの間にか慣れてしまった。そもそも携帯電話からのメールは500バイトという制限があるので，「どうしてもキーボードから入力したい！」と思うほど長い文章は書けないのだ。

そうこうするうち，大学のアドレスに来る電子メールを携帯電話に転送することをふと思いついたのである。

これがたいへん便利であった。大学のアドレスには四六時中メールが入り，内容によっては緊急に対応を考えなければならないものもある。そのため，以前は旅行や出張などでつくばを離れる時はノートパソコンを持参し，現地からもメールチェックをしたものであった。ところが，そうしたメールを携帯電話に転送するようにしてしまえばチェックのためにノートパソコンを荷物に加える必要がない。

もちろん携帯電話では長い文章は書けないので，急ぎの原稿などがある時はどうしてもノートパソコンの出番となるが，そうでない時は重たい荷物を一つ減らすことができるのは実に助かるのである。

授業中どこからともなく聞こえてくる「ちゃっ」という携帯電話の開閉音にも以前ほど苛立たなくなったのも予期せぬ効用だった。これは明らかに授業中に携帯電話でメールの確認をしているのだが，その現場を取り押さえられるほどテキも間抜けではないので以前はこの音を聞くたびにフラストレーションが溜まったものだ。

ところが，自分の携帯電話にもメールが頻繁に届くようになって，この音にも冷静に対処できるようになった。授業中であっても，自分の携帯にメールが届くと，わたしだって気になってしまうのである。落ち着いてマナーの遵守を求めた方がいたずらに腹を立てて注意するよりも効果的であるだろう。

このようにわたしの生活に意外な変化をもたらした携帯電話であるが，いいことづくめなわけでもない。というのも，毎月半ばに余計な心配の種が増えてしまったのである。その頃になると料金明細が届くからだ。

通話料についてはさまざまな割引サービスがあり，使用状況に応じて支払額を抑えることができるようになっているが，iモードの利用にはそうしたサービスは，ない。流行の写真つきメールを送ったりなどはしていないので，「ヘビーユーザー」の範疇には入らないと自分では思っているのだが，それでももともと見込んでいたよりもずっと多い料金を毎月負担している。こうして料金明細を見て涙を流す，というセレモニーが私の毎月の習慣になってしまったのである・・・。

（くろだすすむ　欧州諸言語研究）